

第16回事故対策会議の報告

教育遭対部長 中川和道

第16回事故対策会議が2018年5月18日(金)に開催され、14山岳会26名(末尾注参照)参加のもとに活発な討論が行われた。冒頭に園敏雄 大阪府連理事長から「事故対策会議は、事故の当事者や当事者に近い責任者が一堂に会して経験を語り合い教訓を探しあうことによって事故を減らしていく会合。事故当事者の不明や欠点を攻撃する 吊るし上げ的な会議や責任追及を目的とする会議ではなく、同じ場面に自分が立ったとき、事故を避ける判断の分岐点がどこにあったのかを学びあう会議にすべく運営しよう」との発言があり、中川の司会で討論に移った。その経過を以下にまとめる。

2017年度 No.14 2017/7/30 13:15 TM(女性) 46 泉州勤労者山岳会 大峰山系神童子谷赤鍋の滝(標高950m)

12名(男6,女6)で沢登り。7:30入渓。11:20釜滝で折り返し同じ沢を下る。12:30赤鍋の滝着。左岸スラブをトラバース下降のためフィックスロープを張り、ロープにカラビナを掛けロープを手で持ち(いわゆるカラビナスルー方式で)歩いて下降開始。事故者は2人目に下降。13:15事故者が後ろ向き歩行で下降を始めた2歩目に足が滑り、岩側に倒れ、顔面が岩に当たった。上前歯にぐらつきが感じられ、唇の内を外を切った。そのまま下山し、翌日医師の診察を受けた。傷病名：顔面打撲による前歯打撲と唇切傷

会では事故対策の会議を開き、時系列のひとつひとつに問題を列挙して検討。当日はA4で2ページの写真つき資料に基づき報告。会場での議論も交えて司会者から記述する。(1)懸垂下降か固定ロープ下降か→後者を選択。理由は、最大傾斜線にそって降りるルートではなくトラバース下降ルートであり、途中にテラスがあって中間支点を固定できたため。(2)固定ロープ下降において使う技術はカラビナスルーか巻きつけ結びか→写真3枚や状況説明から、カラビナスルーのリーダー判断を支持するとの会場の感触であった。(3)溪流シューズが滑りやすい状態だったか。(4)事故者をパーティーとして把握できていたか→会の山行への参加数は第2位でよく把握できていた。(5)現場での体調はどうであったか→事故者は日頃から寒がりの自覚があり、当日も寒さを感じてはいたという。これが決定的な要因ではないであろうとの会場の感触であった。

会場での議論で強く指摘された点をまとめる。(1)固定ロープをカラビナスルー方式で下降するさい、岩に正対した姿勢で体の中心線を重力方向にし、左右の足に均等に体重をかけつつ下降するのが良いとのことであった。ロープに完全に手でぶら下がった姿勢となる。(2)この方法でも足が滑ることはあり得る。足で立ち歩行で下降する場合よりもぶら下がり下降の方が足が滑った場合の姿勢の安定性は高い。(3)一般論として、足が滑って倒れる可能性がある場合には、いざ滑ってから対処を考えていては間に合わない。今、足はどう滑るか、滑ったら自分はどう対処すべきか案を持ちながら構えつつ下降すべきである。(4)

体が冷えての行動は不安が大きい。大阪府連 50 周年記念講演で山本正嘉先生が示されたランジ（細かく早い両足踏み 20 回程度）をやってから下降するとか、対策を考えあてよう。

当該の会の事故後の入念な取組みがあり、他の会にも参考になった。

2017 年度 No.11 2017/7/15 晴 14:20 MT(男性) 69 大阪志峰会 比良山系 坊村 明王谷

月例山行として 6 名で坊村駐車場より入山。翌 16 日白滝谷へのウォーミングアップにと 15 日は明王谷入渓。入渓口から 15 分ほど上流付近の右岸の岩場をロープなしで登攀(子どもの冒険学校でもロープなしで登っている)中に最後尾の MT が途中のポイントで行きづまり、しばらく努力したがついに落ちた。岩に顔を向けたまま 1.5~2m 滑落して水中に落下。岩に上あごを強打し、上前歯 2 本脱落、上歯茎を断絶した。自力で歩けるのでハーネスとロープを着け、メンバーのサポートを受けへつりを避けるなど注意して下山。大津市内の歯科医で口腔内縫合術、痛み止め処方などを受けた後、帰阪した。傷病名：上顎打撲、上前歯 2 本脱落、上歯茎断絶。

会では数回の事故対策会議をもとに当日は A4 で 2 ページの資料を提出し報告があった。会場での討論を以下にまとめる。(1)岩は乾いていたが足はぬれていたと思われる。(2)装備に問題があった。近年は溪流シューズが多いが、事故者は地下足袋とわらじを使っていた。足指先にわらじがかからず足指先がはみ出してしまい滑落しやすい。今回はこの事態にいたったと思われる。地下足袋とわらじを使いこなすには熟練が必要である。地下足袋とわらじが本人の技量にかなっていなかったことは否めない。(3)装備のこの問題が生じた一因に、計画書の装備表に細かく指定せず「沢装備一式」としてしまったことがある。経験者ぞろいのためこれでよからうとの油断があった。また、山行計画や準備をリーダーまかせにしてしまったという「慣れ」もあった。(4)本人は在籍 40 年以上で参加率も高く日常トレーニングも行っており、当日の体調も良好であった。(5)本人は沢登りに苦手意識があったが、初級の沢なので安心していった。大阪府連の事故分析 2017 年によれば明王谷 1 件白滝谷 4 件の事故が起きている。初級の沢であっても注意が必要である。(6)会の事故対策会議に本人は欠席したので、他の出席者で議論を進めたのが残念である。(7)会場からは、「落ち方の練習が有効」との発言があった。いざ落ちるさい、岩を手で突っ張って、顔やつま先が岩に当たらないように落ちると良い。泉州労山の事故 2017/1/3 (御着岩南面) と共通点がある。フリークライミングなどで「落ち方の練習」をすると良いであろう。(7)最後に、今後はロープを使うべきかとの論点が出されたが、装備の点検と個人のチェックに気をつけていけば足りるのでロープ必須とはならないとの点で大まかな一致が得られた。

2017 年度 No.20 2017/12/20 20 時頃 MS(男性)32 大阪ぽっぽ会 まほろばクライミングジム

ポルダー壁の課題に 1 人で挑む。右手でホールドをつかみ右手だけでぶら下がった際に右肩に痛みが起る。右肩関節唇の上部を損傷。手術後安静 2 ヶ月リハビリ 2 ヶ月。

ぽっぽ会では4月例会でヒヤリハット座談会をもち、その結果を写真つきのA4で2枚の資料で報告。会場での討論とあわせてまとめる。(1)準備運動は、全身ストレッチ、準備体操、5級～6級を約10課題ののちにこのルート(自分の限界グレード)に挑戦とのことで、準備に問題はないと思われる。(2)この課題の6手目に右手でホールドをつかみ右手だけでぶら下がった際に右肩に痛みが起きたあと断続的に合計6回トライした。痛みが発生したのにアイシングなど適切な処置を施さずトレーニングを続行した。これが右肩を更に傷め、けがを大きくしたと思われる。

討論では、「手術後安静2ヶ月リハビリ2ヶ月とは大きい。何をやってしまったらどこがどう壊れたのか、明日はわが身かも知れないので詳しく知りたい」との声が多く聞かれた。ところが、肩関節唇の上下前後のどこがやられたのか資料に書かれておらず、欠席の本人に代わった報告者からもついに回答は得られなかったので参加者は大いに不満を残した。司会者が会議後に確認したところ、肩関節唇の「上部」とのことであった。今後の教訓として、医療面でのデータを充実させた準備が有用である。一般論として、当該会には可能な範囲で情報提供をお願いしたいと司会者は感じた、また、参加された医師からは「せめて2日前に報告レポートがあれば医療面での事前検討を司会者にお手伝いしても良い」とのお申し出をいただいた。ありがたいことで、司会者はこの方向で進めたいと感じた。

2017年度 No.8 2017/6/4 11:00 HT(男性)76 このはな山の会 鎌倉峡 百丈岩 やぐら横の岩場の救助訓練中、クライミングダウンしようとして左手でホールドを持ったところ、そのホールドがはがれてバランスを崩し、2mほどの高さの岩棚を2、3歩走った後、足から落下し、地面に足が着いたのち受身の姿勢となった。背筋損傷。

資料なしのまま議論が始まった。幸い軽微な事故に終わった。事故再発防止策としては固定ロープを張っておけば良かった、とのことで会場もその認識で一致した。やぐら横の岩場では崩壊が徐々に進行中である。注意を促す看板などあった方がよいのだがとの意見も出された。

この事故については、会での事故対策会議は行われず資料準備もなかった。今後の改善を望みたいところである。

参加：14 山岳会 25名 (泉州4 OWCC4 このはな3 豊中2 志峰2 きたろう2 1名参加の会は ぽっぽ OAR 福島 モンテス つりばし 淀屋橋 カランクルン 雑木)

過去の事故対策会議の記録は、第1回(2011/3/5)をまとめた「大阪労山ニュース」2011年4月号以来、第15回の記録「大阪労山ニュース」2018年5月号へと続いています。労山大阪府連のホームページから「大阪労山ニュース」へとたどってお読み下さい。